対象理解を重視した実習展開

瓜﨑貴雄（精神保健看護実習Ⅱ・精神保健看護領域）

教育上の課題と工夫

新型コロナウイルス感染症蔓延による精神保健看護実習Ⅱにおける最も大きな課題は、臨地で実習を展開できず、精神疾患を患う人と接する機会を得られなかったために、学生が対象者の言動の意味を多面的な視点で検討しながら、対象理解を深めていくという過程を経験できなかったことにある。

2022 年度の精神保健看護実習Ⅱでは、全 4 クールのうち、2 週間の臨地実習を展開できたのは 1 クールのみで、多くの学生は 2〜5 日間の臨地実習となり、残りの期間は学内実習を展開することになった。2021 年度に学内実習を行った際に作成していたプログラムを活用して、2022 年度の学内実習を展開した。2021 年度のプログラムを概ね踏襲しつつも、実習施設と Zoom を繋いで、精神科デイケアの利用者や看護師と話をして生活の様子や生活支援の実際を知る機会を作ったり、精神科病院の臨地実習指導者とのディスカッションをとおして、精神医療や看護に関する課題を検討する機会を作ったりした。また、講義で教授していた内容を演習として組み直し、学生が能動的に学べるようにしたり、「退院前カンファレンス」についてシナリオや配役をグループで検討し、ロールプレイを展開することで、他職種の役割や連携の重要性に関して体験を通して学べる機会をつくったりした。さらに、臨地での実習日数が少なかった学生が看護展開を学習できるようにするために、臨地実習を 2 週間展開できた学生の事例を提示して、一緒に検討する機会をつくった。学生からは、対象者との関係構築の要点として、「生活の困りごとを一緒に考える立場になる」「対象者のペースに合わせる」といった意見があり、学生は対象者とのかかわり方を少なからずイメージすることができたようであった。

2023 年度（1 月現在）は履修した全学生が 2 週間の臨地実習を展開することができている。しかしながら、病棟実習は 13 時までで、その後は施設の学生控室で実習の纏めをするといった展開になる施設も多かった。コロナ禍の教育活動の経験を踏まえて、纏めの時間は、実習記録の整理の他に、教員と学生とで事例を検討したり、実習施設の薬剤師や作業療法士等に臨床講義を行っていただいたり、教員が実習におけるトピックを講義したりするなどして、学生が様々な視点から対象者を捉え、対象理解を深めることができるようにと、工夫しながら実習を展開している。

コロナ禍の教育活動を振り返って

コロナ禍の教育活動を振り返り、改めて本科目の意義を再認識することができた。本科目の履修生の中には人生で唯一の精神科医療施設での看護経験となる者が少なからずいる。私見であるが、臨地実習で精神疾患患者と関係を築く体験をとおして対象者への理解が深まり、精神医療に対するネガティブな見方が転換する学生も少なくない。そのため、本科目は厚生労働省が掲げる「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築に、教育の場から貢献できる貴重な機会であると捉えられる。また、コロナ禍は多くの制限のなかで教育活動を展開せざるを得なかったが、学生が精神疾患を患う人への理解を深められるように、領域担当教員がアイデアを出し合って創出したプログラムや教授方法は、after コロナの精神保健看護教育においても継続して活かすことができると考える。